

人は死なない(本初不生)



平成25年2月10日。この日は陰暦の正月であったが、早朝、再び、あの、不思議な氷の聖体出現があった。今度は、これまでのツクバイではなく、妹の墓の水鉢の中からであった。

ちょうど、東京に住む妹の夫が待望の医学書『正坐を愛する人は正坐からも愛される』(田村茂兵衛著:たにくち書房)上下二巻を出版して、その報告のため墓参りに来る日であった。この医学書の表紙カバーには妹の描いた絵が載せられている。

妹は、ほとんどの生涯を病弱な母(甲状腺の粘液水腫という病気)の世話とこの寺の世話に費やしていた。縁があつて鍼灸医師と結婚、東京に嫁ぎ、そこで一子を授かり、幸せな生活を送っていたのだが、癌を患って、四九歳で他界した。

我々は兄と妹のふたり兄妹ではあつたが、妹はむしろ姉のような気持ちでよく私の面倒を見てくれる、概して世話好きな人間であつた。しかし、幼い頃から、この兄妹は、母が原因不明の病気(随分後になって甲状腺の粘液水腫という病気であつたことがわかつた)ということと、寺という特殊な環境に在ること、周囲からは、かなり露骨に忌み嫌われ嘲笑を受けていた。無理もない、家の中では、四六時中、母親の苦悩の音がヒステリックに響いていたし、陰鬱でゴミだらけの汚い家であつたのだ。それでも、この二人はいつも、おどけながら、嫌なことは一切忘れて、二人して、よく話に興じ、楽しんでた。それは、妹が成長し、他家に嫁いでからでも変わらない天真爛漫な関係であつた。

その妹が他界する際にはあつたが、まだ元気なうちから、不思議にも霊界移行に関する教示が私にいろいろ与えられていた。例えば、遠く離れている妹の病気の症状(その時、妹は心配かけたくないと兄に隠していたのだが)が、兄の私に痛みとして同じような症状が起きていたのである。あるいは、いかにも妹に伝えなければならないかのようにチベットの死者の書など、死後の世界に関するものが私の周りに集中的に啓示された。突然、仏像がこの寺にやってくる(これは乞食坊主のような業者が売りに来ていたのだ)これが不思議にも妹の病気の治癒過程とリンクするかのよう治療のタイミングと一致していたり、この寺で今から100年以上も前の住職夫人の墓が偶然見つかったり、そしてそのボロボロに崩れた、誰ともわからぬ墓石にろうじて文字が残っていて、そこに夕日があたって命日12月5日の文字が浮かび上がって、それが、妹が他界する日を暗示していたりと、あの世に関わる不思議なことばかりが起きていた。甥からのしらせでなんとか臨終には間に合ったが、すでに言葉をおぼわすことは無理であつた。妹を呼び戻そうとあたり構わず大声で妹を呼びもしたが。無理であつた。しばらくして、医師が駆けつけてきて、「ああ兄さんが来てくれたからかあ」と、なにか一人で納得していたようすだったが、後で聞くと検測機に反応が大きく現れて、これはどうしたことかと思つて来たのだそう。

自宅に戻つた妹の遺体を前にし、一晩中、経文をあげていると、天使がやってきた気配を感じたので、私は霊界に送る準備のために、周りの者に「これから瞑想をするのでしばらく私に声をかけないでほしい」と依頼し、守護指導の霊の力を借りて、霊界移行の介添えを依頼しつつ、ブツダの真説を妹の魂に語りかけ続けた(内なる言葉で)。すると、ポトリと葉が落ちるように妹の肉体に明らかな

変化が生じ、肉体は完全に物質化（生気のないものと化）した。魂と肉体を繋ぐ霊子線が切れて、魂が完全に肉体から離れたことを示したのであった。

田舎に法衣等葬儀に必要な支度を取りに戻って、再び、妹の家に向かうとき、いつもの田舎の駅で、上り電車を待っていると、不思議な感覚があった。明らかに私ではないものが、私の目を通して田舎の景色を懐かしんでいるのであった。私の体を通して、この景色、この世の光景を今見ている。それは妹であることが、すぐに理解できたが、妹の自己感覚と私の自己感覚は「自己感覚（わたし）」という点で一緒ではあったが、また、従来の中にはない自己感覚でもあった。

あれから10年。妹は今でも、この寺の何処かにいて私の手伝いをしてきている気配を時折感ずる。しかし、正直言って、死ぬのが早すぎて、私の心には「なんでさっさと死んでしまったのか！」怒りのようなものもあった。妹の魂があのでちゃんと生きているなら、この世の私に証拠を示してほしいと、あらぬことを、あの大光山正徳寺本尊阿弥陀如来に密かに祈っていたところ…そう！なんと！

2月10日、この日は陰暦の正月であったが、早朝、再び、あの、不思議な氷の聖体出現があったのである。今度は、これまでのツクバイではなく、妹の墓の水鉢の中であった。ちなみに、この氷の聖像出現に気づいて、他にも出ていないかと2ヶ寺の墓地をくまなく見まわったが、皆無であった。氷が膨張して少し盛り上がりたり、割れて起き上がったものはあったが、水の中から上に伸びてきているものはどこにもなかった。

もはや、これは、妹の霊性が、けなげにも「人は死なない」ということを兄の前に明確に示すために、如来の許可を得て現してくれたとしか言い様がない。しかも、この聖体出現は、妹という個我の領域をはるかに超えて、如来様からのメッセージでもあった。

というのも、この聖像は「不死鳥」がまさに今飛び立とうとしている姿なのである。しかも、回転する聖十字から飛び立とうとしている。

その飛び立つ方角は、ここから見ると北西の方角、地球儀で見ると、カナダとアラスカの上空を指し示している。一体、これはどのようなメッセージが込められているのか不思議でならなかった。また巨大地震が起きるのだろうか。

いつにもまして聖なる本不生の祈りを意識せざるを得なかった。

そんな矢先、2月16日。ロシアウラル地方に隕石が落下し、衝撃波とともに大きな被害を及ぼした。科学者によると、隕石はカナダとアラスカの上空から大気圏に突入、その角度によって、消滅せずウラル地方まで落ちていったという。その隕石が落ちる姿を暗示していたのか？



それにしても、巨大地震・巨大隕石の衝突、まさに天変地異が起こるさなかそれを少しでもかわそうと、あるいはあらゆる生命や霊界の魂たちが、見えざる神々や如来たちとともに必死に擁護し、復興を支えてくれていることをこの氷の聖像は示しているのかもしれない。震災で亡くなられた方々を含め、あの世に旅立たれたすべての方々の冥福を祈る。

萬歳楽山人 龍雲好久